

私が死ぬ一週間前

A Week Before I Die

contents

私が死ぬ一週間前

004

チョン・ヒワン

067

キム・インジュ

075

ハン・ホギョン

115

コ・ヨンヒョン

125

キム・ラム

136

君のいない、A

183

君のいない、B

192

あとがき

204

私が死ぬ一週間前

○

どこかで聞いたことがある。

死神は、愛する人の姿で現れると。

会いたかった人の姿で現れ、

聞きたかった声で名前を呼んでくれるのだと。

薄桃色の花びらが月明かりにそよぐ、そんな季節の夜だった。家に向かっていた私は、大きく枝を広げた桜の木のそばを通りかかった。

「チョン・ヒワン」

私の名前を、君が呼んだ。

ぴたりと足が止まった。目の前に君がいる。

「……キム・ナム……?」

「相変わらず滑舌悪いな。俺の名前はナムじゃなくて、ラム、だってば」
ほほ笑む君の顔がはつきり見える。

うそだ。目を開けたまま夢を見ているのだろうか。手を伸ばせば消えてしまうのだろうか。君がここにいるはずがない。こんなにも生き生きとした君が、生身の人間の姿で、私の前にいるわけがない。

なぜなら君は、何年も前に……。

「あと二回だ」

「え……？」

「俺の名前をあと二回呼んだら、お前は苦しまずに死ねる」

私のせいで死んだのだから。

「呼べよ。俺の名前」

私が死ぬ一週間前、君が戻ってきた。

一

「簡単だろ？」

しつこいな。

「いいから呼べよ。あと二回呼んでくれたら終わるんだって」

私のアパートに着いてからも、君は全然諦めない。耳をふさいで聞こえないふりをする私に、あれこれと理由をつけては説得を試みる。

「お前さあ、本当に交通事故で死にたいのか？ 言っとくけど、あれマジで痛いんだって。だからさっさと済ませようぜ。はい、即断即決。その方がお前にとってもいいし、俺も楽だし」

このままだと私は、一週間後、正確には月曜日の午後五時三三分四〇秒、横断歩道を渡っている最中に、信号無視の車にはねられて死ぬことになっているらしい。でもその前に君の名前を三回呼ぶと、私の靈魂が君に引き継がれて苦しまずに死ぬるというのだ。それが最も穏やかに死ぬ方法だから、早く俺の名前を呼べとさっきからうるさい。私の本棚にあった分厚い専門書をばらばらとめくりながら、ひっきりなしに口だけを動かしている。机の前に座っていた私は、目の前の白い紙をぼんやり見つめていたが、ペンを置いて君が寝転がっているベッドのそばに行った。

「どうして。寝る」

いくら考えても、言い置くべきことなんて何も思いつかない。この部屋も、備え付けの家具以外に片付ける物は特にない。残そうと思ったところで残せる物など何もなかった。

君は無言でベッドのスペースを空けてくれた。私は寝転がって、薄い布団をかぶった。背中に人の体温を感じる。ごちない。振り返らなくても分かる。背中合わせで横になったまま、私たちがそれぞれ別の思いにふけっていることを。

いやでも君のことを考えてしまう。

ここにいるのは一体誰なの。君の姿をした死神だというなら、どうして高校生の頃の君

ではなく、今の私と同年代の、大人の男の姿でここにいるのだろうか。まるで実際に年を重ねたかのように。

やはり夢なのだろうか。うたた寝から覚めると消えてしまうような。

「寝るんだろ。電気消さないのか？」

「……ほっといて」

「お前、明るいのが嫌いだろ」

私は朝が嫌いだ。日光がまぶしい真昼も嫌いだ。一番いやなのは、蛍光灯の白い光。指先が硬直する。

どうして君がここに。

「電気消すぞ」

本を閉じる音がして、同時に明かりが消えた。暗闇の中で、再び背中がくっついた。

「チョン・ヒワン、また余計なこと考えてるんだろ？」

君の声が低く響く。

私は目を閉じた。幻聴が重なって聞こえる。

——また余計なこと考えてるんだろ？

「考えるなって。大したことじゃない。ここにいるから」

——その癖直せて言っただろ。難しく考え過ぎるなって。言われた通り受け取れよ。だから寝ろ」

——天気もいいし、家にいても退屈だから遊びにいらつて言つてんの。

うそつき。

君は卑怯だ。ひきょういつも、いつもそうだった。

二

幼い頃の最初の記憶は、蛍光灯がやけに明るい病室の中だ。ベッドに横たわった母は、やせ細った指で私と約束した。

「おうちに帰つてぐっすり寝るのよ、ヒワンちゃん。朝になったらママが必ず迎えに行くからね」。

私はうなずき、母に向かって精いっぱい手を振りながら病室を出た。言われたことを素直に信じていた。翌朝、母はもうこの世にいなかった。約束したのに。どこにもいなかった。

「だから、私が言ったじゃない。あれほど反対したのに、どうしてあんな体の弱い女と結婚したのよ。ねえ？　なんとか言いなさい。跡取りでも産んだならともかく、娘なんか産んで、挙げ句にうちのだいな息子を男やもめにするなんて。なんてことよ！　勝手に結婚しておきながら、病院代ばかりかかって、葬式まで出させるなんて。こんなことなら娘なんか産まないでさっさと死ねばよかったのに。最後の最後までお前の将来を邪魔する

なんて。あんな小さい子と二人で、これからどうするのよ」

延々と続く祖母の嘆きを父は黙って聞いていた。白く照らされた病室の、がらんとしたベッドのそばで。容赦なく投げつけられる非難の数々に、力なく沈黙する父の丸めた背中が寂しそうだった。

空のベッド、母が去った跡。悲しみよりも大きな恨みの声が病室に響いた。とうとう耐えられなくなつた私は、耳をふさいでその場にしゃがみ込んだ。

「……ママ」

小さく漏れた私の声に、こたえてくれる人は誰もいなかった。

これからも永遠にいないのだ。ずっとずっと。

三

ほんの少し眠つただけのつもりが、気づけば朝だった。窓辺に差し込む光がまぶしい。いつも閉めきつているカーテンが開いている。まだ寝ぼけているのだろうか。

「起きた？」

誰かの声をする。ぼんやりと視線を向けると君が見えた。椅子に座って、昨夜私が机の上に置いた白い紙を見ている大きな背中が。

「飯でも食べよう」

君は立ち上がって、まるで自分の家のように自然な動きで冷蔵庫を開けた。ぼーっとしたままその様子を目で追う。何ひとつ現実感がない。私は起き上がり、君がわざとらしく床に落としていった紙を拾い上げた。昨夜までは白紙だったのに、何やら文字らしきものがある。

「お？ 何見てんだ？」

落書きのような文章の中に君の名前を見つけた瞬間から、頭がいっぱいになってそれ以上読めなくなつた。私は紙をくしゃくしゃにして机の上に投げた。

君は昔の君ではないはずなのに、あの頃のままだ。何も変わっていない。こんなささいないたずらさえも。どうして。私の頭は疑問でいっぱいだ。

しばらく冷蔵庫の中をのぞき込んでいた君が不満そうに言った。

「ミネラルウォーターしか入ってないぞ。まともに食ってないだろ。よく飢え死にしなかつたな」

古い冷蔵庫の中には、ミネラルウォーターが何本かと、誰かが置いていったビタミン剤くらいしか入っていない。他の食材は昨日全部捨てた。どうして捨てたのか思い出せない。やがて君は冷蔵庫の探索を諦めて、鍋にお湯を沸かしはじめた。棚の奥から消費期限の過ぎたインスタントラーメンを発掘したようだ。

床に分厚い専門書が敷かれ、その上に熱い湯気が立つ鍋が鎮座した。君が箸を差し出す。「命に危険が及ぶほど消費期限は過ぎてない。食え」

箸を受け取らずにいると、無理やり私の手に箸を握らせた。君は器に覆いかぶさるようにして、勢いよく麺をすすりはじめた。初めてラーメンを食べる人のように楽しげに。なんとなくつられて私も手を伸ばした。一口食べると懐かしい味がした。

思い出した。高校生の頃、給食トレーを投げつけて帰宅した日の夜に、君は鍋いっぱいラーメンを作った。いやがる私を無理やり自分の向かいに座らせると、一人でがつがつと食べはじめた。自分の分をすっかり食べてしまった君は、同じ器にご飯をよそってまた食べた。勢いに押された私は、ちびちびとスープをすすりながら君の顔を盗み見た。

——何見てんだよ。

「何見てんだよ」

君と目が合った。薄れた記憶の隙間から、いきなり現実が顔を出す。私は視線を外してうつむいた。自分の器を君に差し出すと、君は小さくため息をつき、こぼれそうなほどラーメンを入れてくれた。器に顔を近づけて少しづつ麺をつまんで口の中に押し込んだ。君の視線が、ほんの一瞬私の方に向けられたのが分かった。

「このまま一日中寝て過ごすつもりじゃないよな？ 何する？ やりたいことがあったら言ってみろよ」

「……なに」

大学には休学届を出したし、アルバイトは昨日付けでやめた。言い残すこともないのにやりたいことなんてあるわけない。私は、空になった器を君から奪い取るようにして流し

台に向かった。君の視線が執拗に後を追ってくる。

「出かけよう。天気もいいし」

「いやだ」

「ほら、また。お前さ、考える前にとりあえずいやって返事するよな」

とりあえずいやだと言ってるのではなく、本当にいやなのだ。そう言いかけたがやめた。話したくない。今は何も。

「まずはスーパーにでも行くか。たとえ一週間でも、食べないわけにはいかないだろ。このままだと事故に遭う前に飢え死にするぞ」

「その方がいいんじゃないの。早く死ねって言ったくせに」

あと二回、さっさと名前を呼んでしまえば楽になれると言っておきながら、今さら飢え死にを心配するなんて理屈がおかしい。口走った言葉は、君に向かって真つすぐに飛んできた。

気まずい沈黙が流れた。

「……ああ、そうだったな」

気が抜けたように君が笑った。さつきより声が近い。そばに来た君は、昔のように私を上から見下ろした。

「それでも、そんな姿は見たくない」

どうして？ そう聞いたら、君はどんな顔をするだろう。

「さ、行こう」

どこか切実な口ぶりだった。私はついになずいてしまった。

「これだけ片付けてから」

だからちよつとそこどいてほしいんだけど。

でも君は動かなかつた。

食器を洗って水切りカゴに置く間、君はずっと突っ立ったまま私を見つめていた。視線を感じるたびにひりひりする。私は君を見ないようにして玄関へ行き、適当にその辺の靴を履いた。君が慌ててついてきて、玄関のドアを開けた。

春の日差しが降り注ぐ中を、君が歩きます。
ない。

君はこんなにもはっきり存在しているのに、ない。
前を歩く君の後ろに、影がない。

四

母の葬儀を終えた夜、疲れ切った父は無理やり笑顔をつくり私の髪をなでた。

「ヒワン、パパがいるからね」

幼い私は、黙ってうつむくことしかできなかった。

「心配ないよ、きつと大丈夫」

根拠も確信もない、ただ、そうあつてほしいという願いだけがそこにあつた。

五

君はカートを押しながら、目についた商品をどんどん投げ入れていく。適当に選んでいくように見えても、君の買物にはいつも決まったルールがあつた。おばさんが好きなワッフル、父さんが好きなエビのお菓子、よく私の口に入れてくれたペロペロキャンデー。そして最後に君の好きなポテトチップス。たまに君が最後の一つを忘れると、私はポテトチップスを背中に隠し持って、こっそりカートの隅っこに押し込んだ。レジでそれに気付いた君は、いつもにっこりと笑顔を見せた。

今日も君はせっせとカートをいっぱいにしていく。君が決めた君だけのルールに沿って。そして私は、君が選んだものを全て元の棚に戻す。そんな私を君は無表情で眺めている。私は棚に並んだポテトチップスをこっそり抱えてカートに入れた。無意識に歯を食いしばっていたせいかな、かすかに顎が痛い。君は小さくため息をつき、再びカートを押しはじめた。大きなカートはいろんな種類のポテトチップスでいっぱいになった。君はそれらを端に寄せて、空いたスペースに食材を積み上げていった。小走りにその後を追う。平日昼間の

スーパーは閑散としていて、試食コーナーのスタッフがあちこちで熱心に試食を勧めてくる。君はそのうちの一箇所で立ち止まり、わざとらしい笑顔であいさつしながら餃子を受け取った。

「ほら、あ」

君はそう言って私の方に餃子を差し出した。食べろと促すわけでもなく、餃子の切れ端が刺さった爪楊枝を持って私を見ている。頑固そうな目だ。仕方なく口を開けると、瞬間に口の中がホカホカになった。

「まあ、仲良しね。新婚さんかしら。優しい旦那さまねえ。ほら、あなたも一口どうぞ。安くはできないけど、試食はたくさんあるわよ」

爪楊枝を受け取っていた君の手の動きが止まった。

「兄妹です」

「あら、そうだったのね。とつても優しそうだからてつきり……うちの子たちなんか目が合えばケンカしてるから、勘違いしちゃったわ」

「僕たちあまり似てないでしょ？ 妹は父親似で、僕は母親似なんです。ええ、よく言われます。ちつとも似てないって。そんなそんな、勘違いすることもありますよ。大丈夫です。代わりにおまけもうちよつともらつていいですか？ あ、はい、ありがとうございます……」

私は自分でも気が付かないうちに歩きだしていた。彼らの会話がだんだん遠くなってい

く。さらに足を速めた。離れた場所までやってきて、ようやく我慢していた息を吐き出すと頭がくらくらした。気持ち悪い。吐きそうだ。

「どうして一人で行っちゃうんだよ。迷子になったら置いてくぞ？」

平然とした顔で現れた君は、周りを気に留める様子もなく私の腕をつかんだ。

「こんなもんでいいかな。さ、行こう」

私は君の手を振り切つて後ずさりした。背後にひんやりした冷気を感じて振り返ると、お酒コーナーだった。私は手当たり次第に中のものをつかみ、両腕いっぱい抱えて素早くレジの方へ歩いた。君はその場であぜんとしている。私は立ち止まって素っ気なく言つた。

「行くんでしょ」

「……文明は何のためにあるのか知ってる？ 抱えてないでここに入れろよ」

「いやだ」

君がまた大きな息をついた。そのままゆっくりとカートを押して、レジに向かう私の後ろをついてくる。今、腕に抱えているもの、あのカートの中のもの、そして君。一体何の意味があるのだろうか。どうせ一週間後、私は死ぬのに。

六歳の頃、私はいつも独りぼっちだった。唯一の肉親である父は常に忙しかった。母の治療費として借りたお金を返すためだ。それでも、生活苦にあえぐほどではなかったようだ。あるいは、無理をしても私には良いものだけを与えたかったのかもしれない。

レースが付いたワンピース。ブロードヘアのバービー人形。大きなリボンが付いた、先の丸いエナメルの靴。同じ年頃の女の子たちがうらやむようなものを全て持っていた私は、いつも一人だった。

みんなに好かれる子ではなかった。仲間に入れてもらおうと努力したことはないけれど、本能的に分かっていた。私がブランコに乗ると、みんなはブランコ以外で遊んだし、私がベンチに座ると、みんなブランコの方へ行った。私が持っていた人形をうらやましそうに見ていた子も何人かいるにはいたが、みんな示し合わせたかのように私を無視した。

それでも平気だった。遊びたくて公園に行つたわけじゃないから。ただの暇つぶしだったし、後で役に立ちそうな情報が必要なだけだった。心配性の父に、今日も公園で遊んだよ、お友達は何号室の誰々ちゃんだよ、と話せるような情報が。

「どうしていつも一人なの？」

君が現れたのは、そんなありふれた昼下がりでだった。他の子たちは向こうで固まって、こちらを見ながらひそひそしている。

「……みんな私のことが嫌いなもの」

「どうして？」

「知らない」

いがぐり頭の男の子は、好奇心いっぱいので私に笑いかけた。

「わかった。君がすっごくきれいだから」

「え？」

「君がとってもきれいだからだよ」

「あんた、バカなの？」

君はぼつが悪そうに頭をかいた。

「あれ？ 違った？ うちの母さんはきれいだっていうと喜ぶんだけど」

「あんた、バカでしょ？」

そうやって君は、私の日常にやってきた。

七

スーパーを出た君は、両手に買い物袋を抱えて私の前を歩いた。その後ろを、私も荷物を持ってゆつくりついていく。日差しが柔らかい午後だった。春の風がそよぐと、花びらがひらひらと散ってゆく。その光景を目にした君がだしぬけに言った。

「花見にでも行くか？」

「……は？」

「お前さ、酒いっぱい買っただろ？　すごい勢いで買いまくってたよなあ」

で、お酒と花にどんな関係があるの？　と言いかけてやめた。確かに分からなくもない。毎年この時期になると、桜の並木道はどこも人でいっぱいだ。うちの近所にも桜の名所で有名な公園がある。行って見たことも、行ってみようと思ったこともないけど。

「覚えてるか？　子どもの頃に約束しただろ？　大人になったらさ、大きな桜の下にレジャーシート広げてビールで乾杯、俺たちもやろうって」

それは君が勝手に言い出したことだ。君が考えて、君が言って、私の心の奥深くにしまっておいたこと。

「この酒、全部持つてくわけにもいかなからなあ。どれ飲む？　持つてくやつだけ選んで」

「……全部」

君が私に約束したことはたくさんある。大きくなったら流れ星を見にいこう。電車に乗って遊びにいかない？　どこがいいかな。山でもいいし海でもいいし。そうだ、日の出を見に行くのは？　一回くらいは見ておくべきだろ……、いつもそんなことばかり言っていたのに。

「お前、まさか道端でゴザかなんか敷いて、あの酒売るつもりじゃないよな？」

「バカなの？」

「じゃあ、あれ全部飲むつもりか？」

だから私は、君が言ったことを、何も実行に移さなかった。

「いつの間にこんな大酒飲みになったんだよ」

私は生き残って大人になってしまった。君は死んだはずなのに、大人の姿で私の元に戻ってきた。

「大人だから」

吐き捨てるように言うと、君が短く舌打ちをした。

「このままだと、アルコール依存症の治療センターで晩年を過ごすことになるかもな」

「知らない。どうせ一週間も残ってないでしょ」

「じゃあ、今やってみるか？」

君が真顔で振り向いた。

「呼んでみろよ」

「……」

何も難しくない。君の名前を呼ぶだけだ。それもたった二回。大したことじゃない。なのに、私は君の横を通り過ぎて足早に歩いた。少なくとも今はいやだ。それだと、あまりにも簡単だから。